
俺たちの物語

天照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺たちの物語

【Nコード】

N9348Z

【作者名】

天照

【あらすじ】

黒いドラゴンに何もかもを奪われたキリヤが旅をして仲間を増やして心も体も強くなり、黒龍に挑む。魔法を使ったり召喚獣を召喚したり戦ったり。そんな彼らの^{ストーリー}物語。

第1話 始まりの日

「嘘……だろ……」

キリヤは、ついさっきまで村“だった”廃墟を前に、呆然と立ち尽くしていた。

つい先程まで確かにこの場所は、キリヤが生まれ育った『アルト村』だった。決して豊かな村ではなかったが、村人は心優しい人ばかりで、とても穏やか村だった。たとえ小さくても人が少なくても、この村は大好きだし、何より誇りだった。

しかし、今はかつての面影もなく見るも無残な瓦礫くずとなつて
いる。

「一体何が……」

つい2時間ほど前、キリヤは母親に夕飯の買出しを頼まれ、徒歩で隣町まで出かけていた。

隣町は村から30分程の場所にあり、道中にモンスターも湧か
ないため、まだ幼かったキリヤにも夕飯の買出し程度は可能だった。

1時間程度で買出しは終り、キリヤは帰り道を歩いていった。

その時、ものすごい爆音とともにアルト村の方角から黒い煙が上
がった。そして黒い“何か”が漆黒の翼を羽ばたかせ、村から飛び
立ち、遙か彼方へと飛翔していった。

(あれは……ドラゴン?)

キリヤは興味本位でドラゴンに関する本を読んだことがあるが、

どれだけ記憶を探っても黒いドラゴンなんてものは存在しなかった。全力で走り村に戻っている間にも、みんなの無事を祈る一方で、言い知れぬ胸騒ぎが無意識のうちにキリヤの足を速くする。

村は地獄だった。

そこらじゅうに死体が転がっていた。そしてそれは知っている顔ぶればかりだった。

跡形もなく粉碎された家々。半ばから折られた時計塔。よく友達と遊んでいた広場も焦土と化していた。

まだ10年しか生きていないキリヤにとって、このあまりにも突然で絶望的な光景は精神的に耐えられるものではなかった。

地面に膝から崩れ落ち、今にも逆流してきてしまいそうな胃物を口をふさいで必死に押さえ込む。

なぜ、一体どうして？ キリヤはこみ上げてくる吐き気を抑えながら考えた。頭に浮かんだのは数分前この村に向かって走っているときに見たあの光景。漆黒の翼を羽ばたかせ、遙か彼方へと消えて行った“あいつ”。可能性としてはそれ以外ありえなかった。

吐き気がおさまると自然と足が動いていた。目で見て分かるものと記憶を頼りに一心に歩き続けた。途中で何度も倒れそうになったが、体を無理やり動かした。

そして、ようやく目的の場所に辿り着いた。毎日食べて、寝て、笑った場所。泥だらけになって帰ってきたらいつも叱ってくれた。そして、いつも優しくしてくれた人がいる場所。我が家に。

しかし、それすらも原型を留めてはいなかった。

「父さん……。母さん……」

んな自分に対する怒り。そして、この村と人の命を破壊した“あいつ”への抑えられない怒り。そのすべての感情を乗せて叫んだ。そしてついにキリヤの意識をこの世界に繋ぎとめていた、精神という名の紐ひもが切れた。

視界がブラックアウトした。

*

*

「うわぁー！」

キリヤはベットから飛び起きた。首は汗でぐっしょり濡れていて、呼吸が荒い。

今の夢を見るのももう何度目だろうか。6年前のあの日から何度も夢に出てくるあの光景。今でも網膜に焼き付いている。

キリヤはふらつく足で窓際に行き、カーテンを開ける。

「ッ」

真っ暗だった部屋の中に明るい朝の日差しが差し込んできた。

眩まぶしい光だった。これからキリヤが歩む道を照らすには十分に。

第1話 始まりの日（後書き）

すいません。やっぱり1話目は何か暗い感じになっちゃいました。
2話目からはだんだん明るくしていきます。

第2話 命の恩人

キリヤがあの時ぶっ倒れた後に目覚めた場所は、見知らぬ家のベツドの上だった。

「うう……」

まだ激しい頭痛がしていたが、キリヤはまだ鉛のように重いからだを持ち上げた。

「どこ、だ……どこ？」

辺りを見渡すと、そこはまったくキリヤには見覚えのない場所だった。

木材で作られている家なので純和風な雰囲気だった。周りを見渡すと、本棚、たんす、キッチンテーブルなどのごく普通の家具ばかり。

まずは、一体ここはどこなのか、誰があの村でキリヤを見つけ、この家まで運んだのか、それを調べなければならなかった。ここでひたすら考えても答えは出そうにない、そう思いベッドから立とうとしたその時、部屋のドアが勢いよく開いた。

そこにいたのは なんと筋肉だった。

全長は1メートル90センチほどの巨体。赤い髭ひげと赤い髪。そして盛り上がった筋肉はそこいらのモンスターの比ではなかった。

“筋肉”と目が合った。キリヤは直感的に悟さとった。殺される、と。

「おお、目が覚めたか坊主！」

しかし、その“筋肉”が発した言葉は人間のそれとまったく変わらないものだった。

「3日も起きないから心配したではないか」

(3日? 俺はそんなに寝てたのか)

ということは3日も寝込んでいる間、この筋肉赤髭達磨だるまさんがずっとキリヤの容態を見てくれたということになる。

「どうだ、具合は?」

「まあ、少しは頭痛がするけど結構良くなりました」

「そうか、それは良かったなあ」

言葉が通じた。ってことはこれは人間なんだ、と少しだけキリヤは安堵あんどする。

とりあえず礼はしなければ、と思いキリヤは頭を下げる。

「あ……あの、ありがとうございます」

するとその男は、顔に笑顔を浮かべ、「いいってことよ」と一言。そして男は椅子に座り、改まったように口を開いた。

「それにしても坊主、あそこで何が起きたんだ? ちとあそこの村の村長に用事があったんで、隣街まで出かけた帰りに寄ってみりゃあ、ものすごいことになっておったぞ?」

それは今この男が一番疑問に思っていることだろう。キリヤは知っていることを詳しく伝えたかったが、あの村で起こったことを思い出そうとすると口が思うように動かない。頭痛もひどくなる。

そんなキリヤの様子を見て男は「いや、無理はせんでいいんだぞ」と言ってくれたが、命を助けられたうえに3日も世話になったのだから、キリヤにはすべてをこの男に伝える義務がある。

「いえ、話せます」

キリヤは動かぬ口を必死に動かし、激しい頭痛に必死に耐え、あの村で一体何が起こったのかを全て男に話した。黒いドラゴンがあの村を襲ったこと。最愛の両親を含めた自分以外の全ての村人が殺されたこと。男は途中で口を挟むことなく最後まで黙って話を聞いてくれた。

キリヤは話し終わると激しい頭痛と眩暈めまいに耐え切れず、またベッドに横になった。

「そうかあ、それは辛つらかったなあ」

男はキリヤに同情するかのように呟いた。

「はい、辛かったです。でもいくら悔やんでも仕方ないんです。過ぎたことは戻って来ませんから」

「そうかあ、お前は強いなあ」

「いえ、人間いつか経験することを他人より早く経験しただけですよ」

口ではそう言えても動揺の色は隠せず、キリヤの声は震えていた。本当にお前は強いな、と男は心の中で呟いた。

しばらく横になっていると頭痛も消え、そういえばこの人の名前知らないなあと思いきりやはとりあえず男の名前から聞くことにした。

「俺キリヤって言います。あなたの名前は？」

「俺あフィストだ」

フィスト、それがキリヤの命の恩人の名前だった。

「フィストさん、聞きたいことが2つあるんですけど……いいですか？」

「“さん”なんて付けるな。フィストでいい。で、聞きたいことって何だ？」

年上の人呼び捨てで呼んだことねえよ、などと思いつつながらキリヤは話を続ける。

「えつと……じゃあ1つ目。ここに一人で住んでるんですか？」

そう、この家は一人で暮らすには大きすぎた。明らかに5人以上の家族でも広さには不自由なく暮らせる広さがある。しかし、キリヤはただ興味本位で聞いただけだったが、なぜだかフィストは悲しい顔をしていた。まるで宝物を失くした^な子供のようだった。

「まあ、一人暮らしだ」

そう言っているフィストの悲しそうな横顔を見たら、その質問を続けようとは思えなかった。

「じ、じゃあ2つめ……何で半裸なんですか？」

そう、この男は家に帰ってきてからキリヤの話を聞き、現在に至るまでずっと半裸だったのだ。

「何でって……暑いからに決まっておろうが」

嘘だろ？ 今雪降ってるぞ。もしかしてこの人は感覚器官まで筋肉でできてんのか？ と、口には出さないが心の中でツッコミを入れるキリヤであった。

「よし、質問は終わったな。俺あまたちよっくら隣街まで用事があるんで出かけてくるが、お前は俺が帰ってくるまでは安静にしていた方がいい。そのベッドに横にでもなっておれ」

質問する前よりした後のほうが疑問が増えている気がするが、まだこの家について良いというのならお言葉に甘えとしよう。そしてキリヤはもう一度大きく頭を下げた。

「本当に、ありがとうございました」

フィストはこちらに顔を向けず、返事の代わりに手を振って家を出てった。

これがキリヤと、キリヤの命の恩人フィストとの出会いだった。

第2話 命の恩人（後書き）

まだ、書き始めたばかりです。なので気軽に感想、アドバイスをしてくれるとありがたいです。

第3話 入門

「ハア……ハア……何でこんなことになんだよ！」

キリヤは森を駆け抜けながら叫んでいた。

キリヤはなぜ走っているのか。それは1時間前のこと。

* * *

キリヤは1週間ほどフィスト宅に居候状態いこうじょうたいだった。

ずっと迷惑掛ければなしだし、いつかは出て行かなきゃなあ、とキリヤは思っていた。

そんなある日、キリヤはあることに気づいた。フィストがどこか出掛けて帰ってくる時は、いつも何かでかいモンスターのような物を肩に担いで帰ってくることに。

とりあえずキリヤは疑問に思ったので聞いてみた。

「あの……いつも何かでかいモンスターみたいなもの担いでますけど、どこで買ってるんですか？ そんなに大きい物」

するとフィストは平然とした顔で答えた。

「いや、モンスター“みたい”じゃなくて“本物”のモンスターだぞ。それに“買ってる”んじゃない。 “狩ってる”んだよ。こいつは今日の夕飯だ」

ええええええええええええ！？ とキリヤは心の中で叫んでしまった。

キリヤは今まで、すぐそこにある街で買ってきてるやつだと思っていたが予想外。この男は狩っていた。

モンスターといえばあの強くて凶暴なやつだ。『出会ったらずぐ逃げる』が鉄則のモンスターを狩ってきた？ 確かにこの世界にはモンスターを狩ることを仕事としている人たちはいるらしい。しかしそんな人たちも大抵は2〜5人程度のグループを作って狩りをする。なのに、この男は1人でモンスターを狩って来たのだ。それにこの人さつきなんて言った？ 今日の夕飯？ 今日の夕飯！？ 俺にあのグロテスクなモンスター食わせる気かよ！ ていうかこの人がああいうもん持って帰った日の飯は変な形してなかったか？ てことは何回も俺はあんなグロテスクなもん食ってたのかよ！ でもめっちゃうまかった！ 実は見た目によらず料理得意なのかよ！ キリヤは心の中で連続でツッコみまくった。そして心を落ち着かせるために1度大きく深呼吸をした。

「えつと……もしかして……素手で倒したんですか？」

素手で倒したとなればまたツッコまなければならぬ。

「いや、さすがの俺でも素手でモンスターは倒せんなあ」

良かった。

「でも、この武器は使ってるぞ」

「武器？」

フィストが柵たなから取り出したのは腕の形をしている金属の腕着装型武器だった。だから要するに……、

「ほとんど素手じゃないですか！」

と、今度は反射的に口に出してツツコンでしまった。
だがフィストは真剣な顔だった。

「あのなあ坊主、そもそも武器を持つてるってことの意味がどう
いうことが分かってるか？」

「？ モンスターを倒すため……ですか？」

フィストは大きくため息をついた。

「そうだよなあ。まだ子供だし知らないのも無理はないか」

とブツブツ言っていたが、改まった顔をしてこつちを見た。

「いいか、坊主」というフィストの先生めいた口調の言葉から話
が始まった。

この世界には4種類の人間がいる。

まず1つめが『魔術師』^{マジシャン}の称号を持つ人間。読んで字の如く魔法
使って戦う奴らだ。だが魔法つたつて数えきれねえほどあるから他
人と同じ魔法は絶対に使えねえ。だから自分が使える魔法は全部自
分だけの魔法だ。魔法を使うにはもちろん魔力は必要だから無限に
発動できるモンじゃないが、魔力がないやつだつて鍛えれば魔力は
生まれる。それに、魔力を持つてるやつも鍛えれば自分の最高魔力
量を底上げ^てできる。だがなあ、次のはそうはいかねえんだ。

2つめが『召喚師』^{テイマー}の称号を持つ人間。こいつらは召喚獣を召喚
して戦う奴らだ。だが、こいつらは元から持つてる召喚師としての
素質でなれるかなれないかが決まっちゃうから、鍛えてどうこつっ
て訳にやあいかん。だから、この世界で一番少ない人種の人間だ。

そして3つめが俺の持つてる『戦士』^{フレイカー}の称号を持つ人間。こいつ
らは自分だけの武器を使ってモンスターと戦う。もつと言えればほと

んど自分の体を使って戦うから、魔法を使って戦うマジシャンや自分のモンスターを召喚させて戦うティマー達と比べて、動けるのは当たり前なんだ。まあ傲慢するわけじゃないが俺も中々強いぞ？

んで最後が『民^{バル}』。こいつらは何も称号を持ってない人間のことだ。この世界の人口の5割以上の人間がこれだ。まあ命を懸けてモンスター狩って金稼ぐより、普通に仕事して金稼いだほうがいいって思ってる奴らが大半らしいな。

この世界にはマジシャン、ティマー、ブレイカー、この3つの内2つの称号を持つてる奴らがいる。そいつらを“二重称号^{デュアル}”って言うんだがこの世界には十数人しかいないらしい。だがもつと例外な奴らがいるなあ、3つの称号全てを持つてる奴を“三重称号^{トリプル}”って言うてるんだが、まあこの世界で数人しかいない例外中の例外だ。

というのがこの世界の作りらしい。

キリヤは話を聞き終わった瞬間に身を乗り出した。

「てことは、俺も強くなれるんですか!？」

強くなれば“あいつ”を倒せるかも知れない。キリヤはそのことで頭がいっぱいだった。

「まあ、修行したら誰でも強くなれるぞ。多分」

なら修行して誰よりも強くなってやる。“あいつ”よりも。

「俺は……俺は強くなりたい。誰にも負けなくらい。“あいつ”に負けなくらい。だから……俺を弟子にしてください!」

戦い方を教えてくれる人はこの人しかいない。キリヤはそう思い頭を下げた。

一方フィストは……。

「ガツハツハツハッハ！ 『強くなりたから弟子にしてください』か！ 言いよるのう坊主！ そういうやつは嫌いじゃない、よからう、弟子にしてやる！」

「「」「」「」快く承諾してくれた。

「だがなあ、俺の修行はちときついぞ？」

「やってやりますよ！」

“あいつ”を倒すためならどんなに辛い修行だって耐えられる。そう思っていた。そう思っていたのだが……。

*

*

現在キリヤは森の中を爆走しながら叫んでいた。

「辛いとは言われたけど……こりゃねえだろ

「！」

1時間前に始まった修行はこういう内容だった。『この文字が書かれた石を日暮れまでに取って来い。取って来れなかったら今日の夕飯は無しだ！』と言って文字が書かれた石を崖からぶん投げた。キリヤは心の中で、どこの仙人の修行だよ！ とツッコんでしまったが、もう今は石を取って来るしかない。

「ああもう、ちくしょ

「！」

キリヤの叫びが静かな森に響いた。

第3話 入門（後書き）

大体世界観が決まってきました。どんどん細かい設定も増やしていくつもりです。

第4話 修行

「お腹が減りました。ご飯をください、師匠」

「だめだ」

という会話をもう何度繰り返したことだろう。

結果を言うと、石拾いの修行は失敗に終わった。

キリヤは先程の修行で（奇跡的に）石を見つけるところまではいったのだが、崖の下まで石を探しに行っていたので家まで帰ってくる途中に日が暮れてゲームオーバー、という結果に終わった。“全然歯が立たなかった失敗”より“あともう少しだった失敗”になっ
てしまったことが余計に悔しい。

「すごい惜しいところだったんですよ！」

さつきから何度もそう言っているがフィストの答えはいつも、

「失敗は失敗だ。何度言っても飯はやらん。」

と言いながらおいしそうに夕飯を食っている。

まだ10歳の男の子がこんなに頭下げてご飯をねだってるのに米ひとつつukれないなんてあんたは悪魔か！ 幼児虐待で訴えてやる！と犬歯を剥きだしにして睨みつけても、元からそういう（一方的な）約束だったので米はひとつも出てこない。

結局キリヤは、腹の虫を大音量でならしながらその日を終えた。

修行2日目。

フィスト曰く、これから半年間は体力作りをやるらしい。

キリヤはフィストに連れられ、昨日フィストが石をぶん投げた崖の下に到着した。もうなんだか嫌な予感がするが、まだそうと決まったわけでは無い。自分の師匠を信じる俺！ きっとその川で石拾いだ。

するとフィストがなんか物凄い笑顔でこう言った。

「よし、今からこの崖を登る」

裏切り者めえええええええ！ キリヤはまた心の中で叫んだ。

無理に決まっている。崖はどう見ても50メートル以上ある。そこを命綱無しで登れと？

そんなキリヤの不安そうな顔を見てフィストは、

「大丈夫だ。俺も登るから」

そういう意味じゃねえよ！ 何もかもが根本的に間違ってるんだよ

筋肉マン！

心の声すらも嘔れそうになりながらキリヤは叫んだ。

「よし、登るぞー」

未だに心の中で葛藤中かっとうのキリヤを無視して、フィストは崖を登り始めてしまった。

いいよ、やってやる。絶対登りきってやる。

そう覚悟を決めたキリヤであった。

20分後

死ぬ！ もうホントに死ぬ！ 嫌だ、帰りたい！ でも帰れない

！怖い！ お父さん、お母さん、もうすぐそっちに行くかも知れません。

キリヤは命懸けで6割程度登っていた。

「おゝい、まだか」

一方フィストはもう登りきっていた。

「師匠！ 助けてください！ 俺死んじゃいます！」

「大丈夫だー、登れるって思ったら登れるぞー」

あんたの根性論なんか聞いてちやいなんだよ！

キリヤはこんな状態でもツツコミつつ、必死に足を動かした。

40分後

「ハア……ハア……死ぬ……かと思った……」

キリヤは死ぬ気で足を動かした結果登りきっていた。

「やるじゃないか、坊主」

「はい……体力には……自身が…………ありますから……」

キリヤはかなり息を切らしているのに、フィストは平然としていた。人間かどうかが怪しくなるほどに。

「疲れたか？」

「はい」

「休んでくか？」

「もちろんです」

というわけで1時間ほど休憩を取り2人で家に帰宅した。もちろん今日は夕飯を食った。

それから約3ヶ月間。はっきり言って毎日が地獄だった。

命を掛けるほどの修行内容ばかりだったが、キリヤは走り登り叫び、師匠のサディスティックな修行を耐え抜いた。結果、今では大抵の修行はこなせるようになったキリヤだった。

そんなある日。またしても師匠による無茶な言動から地獄の日々が始まることになった。

それはいつも通りの朝飯の時間のことだった。

「なあ坊主、最近は何やってもできるようになったんじゃないか？」

「そうですね？ まあなんとなく前と比べてできるようになった気はしますが……」

「んじゃ、いっちょステップアップしてみっか」

「へ？」

だらしない声を出したキリヤにフィストはとんでもないことを告げた。

「今日からメニューに『モンスター狩り』を入れる」

「は？」

というわけで今日から（ほとんど強制的に）『モンスター狩り』
をすることになった。

朝食が終わると森へ出た。そう、何も持たずに……。

「って武器無しですか!？」

「何言ってるんだ。お前武器持ってないだろ？」

「じゃあ武器買ってくださいよ」

フィストは鼻で笑ってこう言った。

「金がない」

「……………」

長い沈黙。

そうか、お金がなかったのか。知らなかった。とりあえず謝ろう。

「いや……あの……なんかすみません」

「構わん。別に稼ごうと思えばいくらでも稼げるからな」

「? じゃあなんで稼がないんですか？」

フィストは大きく息を吸い、

「めんどくさい!」

などと抜かしやがった。

金を稼ぐのがめんどくさいってどういうこと?

「……そっすか。じゃあもう修行やっちやいましょう」

キリヤは半ば投げやりになってそう言った。

「よし。じゃあ修行の内容を説明する。まず最初お前にはものすごい弱いモンスターと戦ってもらおう。まあ素手だしな。そして万が一の時に備えて俺も近くにはいるが、基本手は出さん。本当に危なくなつたときにだけしか助けには入らない事を覚えておけ。説明終わり! 何か質問は?」

「無茶です!」

「やればできる! さあ来い!」

キリヤはフィストに服の襟元えりもとを掴つかまれ森の奥へ引きずられて行った。

キリヤが連れて来られた場所は森の中の、半径50メートル程の空間がある場所だった。

そこには、体長が1メートル80センチ程で二足歩行のトカゲのような、いわゆる『リザード』と呼ばれるモンスターが1匹いた。まだこちらには気付いてない様子だった。

「今からお前にはあいつを倒してもらおう。あの『リザードマン』はリザードの中でも弱っちい方だが、お前の歳としで素手で倒すとすると結構厄介やっかいなやつだ。奴は今ここで役立つスキルは持ってないが、油断したら……死ぬからな」

「何で戦闘直前にそんな怖い事言っんですか」

キリヤは横目でフィストを睨んだ。

「まあ、要するにがんばれって事だ！ ガツハツハツハツハ！」

すると今までこちらに気づかなかつたりリザードマンが、フィストの笑い声でこちらに気付いてしまった。リザードマンは敵意剥き出しに喉を鳴らしながら物凄い戦闘態勢でこちらに襲い掛かってきた。

「さあ行つて来い、坊主！」

キリヤは背中を押されて、木が生い茂った森の中から飛び出した。やってやる、やってやるよ！

背中を押された勢いからさらに加速し、キリヤは目の前の敵に向かって全力でダッシュした。

キリヤは相手に近づくにつれて、自分と相手の身長差を実感していた。相手が1メートル80センチ程で大人と同じような身長でも、まだ身長が1メートル50センチ程のキリヤにとっては“巨大”だった。だが逆に言えば、その分キリヤは小回りがきくということになる。それを利用すれば勝てない相手ではない。キリヤは姿勢を低くし、猛然と走った。

「オラアッ！！」

先手はキリヤだった。

最高速度のまま、キリヤはリザードマンの顔面にドロップキックをお見舞いした。それを受けたリザードマンは、後方に3メートル以上吹っ飛ぶ。

吹っ飛ばされたりザードマンは驚いたことだろう。自分より小さな相手に顔を蹴られたのだ。驚かない筈はずが無い。だが一番驚いていたのはキリヤだった。あの巨体が、たかが身長1メートル50センチ、たかが体重40キロ前後の自分の蹴りで3メートル以上も吹っ飛んだのだ。これで驚くなど言う方が無理だ。

あの命懸けの修行により、キリヤの腕力、脚力、瞬発力、精神力が本人の気付かないうちにとつともなく上がっていたのだ。

(よし、いける！)

キリヤは追い討ちをかけるように走り出し、起き上がった直後のリザードマンの顎あごに勢いよくアップパーを決めた。

それを喰らったりザードマンは目に見えて分かるほどブチ切れていた。リザードマンは猛獣のような叫びを上げながら全力でキリヤに突っ込んできた。

「ウオラッ！」

しかし、キリヤは殴りかかってきたリザードマンの腕をつかみ取り、その勢いを利用して背負い投げの要領ようりょうで後方に巨体を投げ飛ばした。

後方に飛んでいったリザードマンは背中から地面に叩きつけられた。

(もう少し、もう少しで勝てる！)

キリヤが最後の技を決めようと思ったその時。リザードマンが逃げるように走り去っていった。

「……え？」

不思議だった。モンスターというのは普通、倒すか倒されるかするまで戦いはやめないものなのだが、明らかに今リザードマンは逃げている。

結局俺の勝ちって事でいいのかな？ と思いキリヤはフィストの方を見た。するとフィストも不思議そうな顔をしていた。

しかしキリヤがフィストの元へ戻ろうとした直後、フィストの表情が凍りついた。

フィストはキリヤの方、正確に言えば、キリヤの後ろからアックス片手にキリヤに向かって走ってくるリザードマンを見て驚いていた。

「逃げる！ 坊主！」

フィストの焦りの表情は初めて見る。

キリヤも、アックス片手に走って来るリザードマンを見た瞬間は驚いたが、すぐに戦闘態勢に入る。

「大丈夫です！ さっきは一発もあいつの攻撃受けてません！ このまま倒します！」

「違う坊主！ そいつの武器が危険なんじゃねえ！ そいつ自身が危険なんだ！」

の攻撃で分かったので、确实だった。

(だめだ……負ける……)

圧倒的な戦力の差に、キリヤは足が震えていた。その瞬間にもアックスが顔に迫ってくる。

(俺はここで死ぬのか？ こんなところで？)

キリヤはほとんど諦めてしまっていた。こいつには絶対に勝てない、そう思ってしまった。

頭に浮かんできたのは父と母の顔。キリヤに向かってやさしく微笑んでいる。

(死んだら……父さんと母さんに謝りに行く……)

刻一刻と迫るカウントダウンの中でキリヤは考えていた。

(でも死んだら、なんて謝ればいい？ 『最後は諦めて死んじゃいました』？ 言えない。いえる訳が無い)

キリヤの右手の甲が淡く赤く光り始めた。

(そうだ、そうじゃないか。俺は“あいつ”を倒すまで死なないって心に誓ったじゃないか。なら、こんなところで死ねない……いや、死ねる筈がない！)

キリヤの右手が太陽のように激しく光り輝いた。

キリヤは、現実意識が戻った直後、リザードマンが木を切るよ

キリヤは右手を見せた。先程は無我夢中だったので気付かなかったが、手の甲には、剣の形をした赤い紋章があった。

「なんですかこれ!？」

「坊主、よく聞けよ。こいつはなあ……………」

フィストは、はっきりとした声でこう言った。

「『^{フレイカー}戦士』の称号だ」

「ウソオオオオオオオ!？」

キリヤはあまりの衝撃に叫んでしまった。

「嘘じゃねえよ。これを見る」

そう言ってフィストは右手の手袋を外した。なんとそこには、今キリヤの右手にある紋章とまったく同じものがあった。

「俺がこの称号を手に入れたのは18歳の頃だ。当時は俺が最年少の『^{フレイカー}戦士』保持者だったんだが…………お前に越されちまったな」

うまくは言えないがキリヤは物凄くうれしかった。これでもっと強くなれた。そう思えたから。

「これが俺の称号……………」

キリヤは右手の甲を見ながら呟いた。

「じゃあ俺、師匠より強くなれましたか？」

冗談半分で言った言葉だが、キリヤは殴り飛ばされた。

その後少しの休憩を取った。

「よし、そろそろ帰るか」

「はい！」

そういうわけで家に帰ることになった。

(それにしても、スキル『スラッシュ』が発動したりザードマンを“雑魚”とはな……)

フィストは、なんだか今はテンションが高めなキリヤの背中を見ながら心の中で呟いた。

(正直、俺も素手じゃあいつにゃ勝てんわ)

第4話 修行（後書き）

長くなってすいませんでした。書きたいことがたくさんあったので
ついつつかり。次はちよつと短めになります。

第5話 俺の相棒

始めは弱いモンスターとの対戦ですら苦戦していたキリヤだが、師匠のステキ案により、そりやあもう森の中でも最強クラスのモンスターと戦わされた。『負けたら今日の夕飯なしルール』により引くにも引けない状況の中、引かなかつたらモンスターにぶつ飛ばされるという最悪のシチュエーション。もう何がなんだか分からないまま戦ったキリヤ。そんなことをしている内に、不思議とモンスターの弱点なども分かるようになった。

今ではこの森で最強クラスの『デーモン系』や『パラサイト系』のモンスターも難なく素手で倒せるようになった。

あまりの成長の早さにフィストは驚いていた。一度二人で組み手をやったが、もちろんキリヤがフィストに勝てるはずもなく結果は惨敗。フィスト曰く「まあ、修行が足りんってことだな！ ガツハツハツハツ！」などと言っていたが、はっきり言ってフィストに勝てたらそいつは既にモンスターだ。

そして3ヶ月が経った。

ある日の朝。いつも通り食卓で朝飯を食べているキリヤに、フィストは言う。

「おい坊主、そろそろお前の武器でも買いに行ってみるか？」

「え？ いいんですか？」

「お前も一応ブレイカーだからなあ。武器を持ってなきゃあブレイカーとは名乗れんし」

「一応って何ですか。一応って」

「だから今から準備しろ。今日隣街まで武器買いに行くぞ」

キリヤの言葉は華麗にスルーされ、今日は武器を買いに行くことになった。

実はキリヤは内心めちゃくちゃワクワクしている。武器というのはブレイカーの証。改めて自分がそんなに成長していることを実感していた。

とりあえず隣街『アリエスタ』まで来たキリヤたちは、武器屋に向かった。

武器屋に着くと、フィストは「俺あちよつと用事があるから、この金使つて好きなもん買えや」と言つてキリヤに金を渡すと、どこかへ行つてしまった。とりあえず何か買おう、と思いキリヤは武器屋の中に入る。

武器屋の中は結構広いスペースがある。しかし、そのほとんどを埋め尽くす程の武器の量。

「こんなかから選ぶの？ どう考えても多いだろ……」

物にさえツッコむことが出来るようになったキリヤ。

とりあえずはどんな武器があるのか見て回ろうと歩き出す。

大剣、双剣、槍、太刀、ハンマー、日本刀、片手剣、鎌、銃剣、杖、弓 etc

「多すぎる……」

店内を1周するのに30分掛けたが、多すぎる武器の量に目を回して挙句の果てには気持ち悪くあげくなってしまう始末。ここで世界初『

武器酔い』というものが誕生した。

「お客様？ 大丈夫でしょうか？」

武器酔いにより膝を崩し両手を地面に着いているという、なんとも情けないキリヤの様子を確認しようと、武器屋の店員が話しかけてくる。

「いや……あの……その……えっと……」

「お客様？」

「ええい！ これ下さい！」

キリヤは物も見ず、壁に立て掛けてある黒い“何か”を掴み、店員に突き出す。

「は……はい」

店員は驚きながらも決算を済ませた。

“何か”を渡された瞬間キリヤは店の外に突っ走って行った。

「ぶはあっ！」

肺に溜^たまっていた空気を口から吐き出す。

こんな事が起こってしまったのはキリヤの性格の問題だった。

実はキリヤは極度の人見知りなのだ。通常の人見知りというのは、知らない人と会った時に、他人以上に恥ずかしがったり嫌がったりすることである。だがキリヤの人見知りは他人のそれと比べて激しすぎた。もちろん誰とも話せない訳ではないが、先程のようにいきなり知らない人に話しかけられてしまっただけでは息が詰まってしまうほ

ど致命的なのだ。結果、先程店員にいきなり話しかけられたキリヤは焦りのあまり、ちらっと目に映った“何か”を反射的に買って店から逃げて来たのだ。じゃあ何故フィストと出会った時は平気だったのか。それは、あの人は見た目が人でも中身がモンスターだから“人”見知りには利かない、そういうキリヤの解釈だった。

「はあ……………いつ直るんだろう、これ」

自分が人見知りだと分かっているもどうやって直すかが分からない。そんな状況が何年も続いている。

「あ、そっぴゃあ俺何買ったっけ」

今更ながら自分が買った物を確認するキリヤ。

「何これカツコイイ！」

それは漆黒のように黒く光る太刀だった。全長はキリヤの身長程もある。刀身も柄の部分も全て真っ黒。そして柄の部分に札のようなものが付いていた。

「『霧影』？ ああ、こいつの固有名か」

それがキリヤの武器の名前。

「これからよろしくな、相棒」

柄の部分と熱く握手を交わしたキリヤは、その後フィストと合流してウキウキ気分であ家に帰った。

フィスト曰く「太刀の扱いは難しい」らしいのだが、そんなこと

は関係ない。こいつは俺の相棒だ。たとえちよつとした弾みで買ってしまった刀でも、キリヤは“偶然”なんてもんじゃなく何か“運命”を感じていた。

そして次の日から武器を使った修行が始まった。最初はフィストから太刀の説明を受けた。

太刀のメリツトは刀身が長いため刃の届く範囲が大きく、中距離戦に優れているということ。逆にデメリツトは敵に近すぎると満足に刀を振れないこと。かなり重いので扱いが難しいことなどだった。前者はどれだけ努力しても変えようのない事実だったが、後者なら体を鍛えればどうにかなる。そしてキリヤは既にその筋力を、フィストとの修行により手に入れている。それを全て理解した上での修行が始まった。

最初の1ヶ月は太刀の感覚を体に染み込ませる為に、ただひたすら刀を振り続けた。頭の上から目の前に振り下ろす。そしてもう一度頭の上に刀を持ち上げ、振り下ろす。その作業の繰り返し。何度も振っていると手の皮は剥け、肉刺まめもできた。しかし、何度も手の皮が剥けている内に皮膚が硬くなり、傷はできなくなった。

太刀が体に馴染んだら、技を磨き、それを反復、応用。抜刀、峰みね打ち、突き、なぎ払い、数多あまたの技を教わった。

それをマスターした後は、モンスターとの戦闘。この森の最強クラスのモンスターを、素手で倒せるキリヤにとって、武器を使ったモンスター狩りは朝飯前だった。

いくつもの事をフィストに教わり、そして半年が経った。今ではキリヤは立派な「ブレイカー戦士」になっていた。

第5話 俺の相棒（後書き）

短めだったのですぐ書き終わりました。やっと武器ゲットです。これからどんどん強くなっていきます。

第6話 ゴブリン退治

半年間の太刀修行の末、キリヤは立派な『戦士』^{フレイカー}になつていた。今では太刀を自分の体の一部のように動かせる。背中の鞆^{さや}に入っている相棒とは息がぴったりだ。

自分では強くなったと思つてゐるが、フィストには何度やつても勝てなかつた。一度あと一步のところまでいったのだが、真剣白刃^{しんけんしろ}取り^{はと}という現実離れた技を決められてあえなく敗北。それから一度も勝つていない。

ひたすら修行に没頭し続けたキリヤは、ずっと世話になつたフィスト宅を出て行くことにした。1年間迷惑を掛けっぱなしで面倒を見てくれたフィストには何度も礼を言つた。いつでも帰つてきていいからな、と言われたのが親子離れみたいで嬉しかったし少し淋^{さび}しかった。

そして現在。フィストと別れたキリヤは隣街『アリエスタ』へ向かつて移動中。

「辛かつたな。でも楽しかつたな。」

独り言を言いながら歩いているとアリエスタに着いた。これでここに来るのは2回目だが何度来ても人が多い。そして広い。

(よし、まずは金が必要だ)

これからこの街で生活していくにはお金は欠かせない。宿を借りるにも食料を買うにもお金は必要だ。

(どこ行きやいつかなあ)

何か儲かる仕事を見つげようとぶらぶらしていると『アリエスタ集会所』という場所に着いた。もしかしたら集会所に依頼掲示板があるかもしれないと思いキリヤは集会所に入る。

中は意外と狭く、食食用テーブルが4つ程と掲示板、依頼受け付けのみというシンプルな場所だった。

キリヤは掲示板を見る。そこにはモンスター狩りの依頼が山ほどあった。とりあえず一番報酬額が高い依頼を選び、依頼用紙を受付へ持って行く。しかし、受付係りの小太りのおじさんは小難しそうな顔をした。

「坊や、これは遊びじゃないんだよ？ 子供がモンスターなんてもんと関わっちゃだめだ。もう帰りなさい」

「え？ いや……でも……」

「たとえふざけてるんだとしても背中になんなオモチヤ着けていたら親御おやさんが悲しむよ？ さあ、帰った帰った」

相棒をオモチヤ扱いされた挙句あげく、集会所から追い出されてしまった。

キリヤはむかつ腹を立てたが、それは当たり前といえは当たり前なのかもしれない。キリヤと同じ年頃の子供は外で元気良く遊ぶのが普通なのだろう。モンスターなんてものと関わるのは遠い未来の話。大人になるまでは街の中で安全に暮らす。街の外には絶対出ない。そんなルールの下で周りの子供は生きている。いや、大人もそうだ。だが他の人と違い、今までモンスターという生物と関わりすぎたキリヤにとってそんな生活のほうほうが珍しいと思えた。というよ

り馬鹿げている。なぜそんな家畜のような生活に耐えられるのか？
こんなにも世界が広いのだから危険を承知でも外の世界に出たい
という奴はいないのか？ キリヤは昔からその事を疑問に思ってい
た。

(とりあえず今はなんとしても金を稼がなければ)

しかしまた集会所に入っても追い出されるだけなので、どうしよ
うか迷っているとふと右手の紋章のことが頭に浮かぶ。確かこれは
ブレイカーの証。この紋章を持つ物は強い。ならばこの紋章を見せ
たらどうなるか。フィストには、面倒なことになるので極力他人に
は見せるなと言われているが、背に腹はかえられない。

「よし」

キリヤはもう一度集会所に入った。そして受付まで小走りで近づ
く。それを見てまた小太りの受付係りは何か言おうとしたが、キリ
ヤが先に口を開いた。

「子供に仕事をしちゃいけないという決まりはありません」

そう言ってキリヤは右手の皮手袋を取り、ブレイカーの称号を見
せつけた。

「なっ

」

小太りの受付係りは目を丸くして驚いていた。確かに驚くことだ
ろう。フィストからはキリヤが最年少戦士所持者ブレイカーと言われた。なら
ば驚かない筈が無い。

「これで分かってくれました？」

するとどういう事だろう。なんと頭まで下げて依頼を受けさせてくれた。

(便利だなあ、これ)

キリヤは準備が整い次第、すぐに出発した。

依頼の内容はもちろんモンスター退治。ターゲットはゴ布林系モンスター。固有名は『パワーゴ布林』。名前の通り、力が馬鹿にならないほど強い。しかしその反面動きは鈍い。特徴は大きな棍棒と赤い体。

依頼用紙に書かれている情報を頭にインプットし、キリヤは今街から出てすぐの広い草原を疾走している。

(そういえば森のモンスターとしか戦ったこと無いからワクワクするな)

などと呑気な事を考えていると、小高い丘の上にターゲットを発見した。大きな棍棒に赤い体、角が生えていて盛り上がった筋肉に鋭い目つき。体長はキリヤよりやや高めのパワーゴ布林がそこにいる。

(よし、戦闘開始！)

『霧影』の柄の部分をつまみ、キリヤは戦闘態勢に入った。

あと20メートルというところでキリヤもまた気付かれた。

そこでキリヤはふと思う。パワーゴ布林は力が強い、それは依頼用紙に書いてあったし小太りの受付係りからも聞いた。いやしかし、だがしかし 一体どれほど強いのか。

キリヤの素早さなら攻撃を避けてカウンターを狙えば難なく勝てるだろう。だがキリヤは知りたかった。どちらの力が強いのかを。フィストから学んだことは“習うより戦え”だった。ならば実戦で相手の力の強さを学ぼう。

というわけでキリヤは真っ向からパワーゴブリンに突っ込んだ。

「うおら

！」

ガンツ、という音と共に太刀と棍棒が交わった。そしてそのまま鐙ていし迫り合い。

さすがはパワー系と言うべきか。力が今まで戦ったことがあるモンスターと比べて半端なく強い。

「クッ」

強い、強すぎる。押されている。圧倒的に力負けしている。

そう、だからこそ

俄然がぜん燃えてきた。

「強えーなあ、お前

けどっ！」

キリヤは足を踏ん張り太刀を握っている手に渾身こんしんの力を込めた。

「まだ師匠の方が強ええ！」

キリヤはパワーゴブリンを棍棒ごと叩き斬った。がああああという声を出してゴブリンは倒れる。

「よし！ 俺の勝ち！」

キリヤは右手でガッツポーズを決めた。

倒したパワーゴブリンは集会所に持って行って報酬をもらった。周りの大人も受付係りのオツチャンも目が飛び出るほど驚いていたが、このくらいのもンスター退治はキリヤにとって朝飯前だ。まあ、少しばかり苦戦はしたが。

とりあえずキリヤは報酬の金で宿を借り、食料を買った。

「よし、とりあえずこれで全部OKだな」

11歳のキリヤの一人暮らしが始まった。

第6話 ゴフリン退治（後書き）

11歳で一人暮らし始めちゃいましたよ。早いですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9348z/>

俺たちの物語

2012年1月6日22時50分発行